

ガッツ先生へ

ラジオネーム：はるみい

地元の同級生から、ガッツ先生が亡くなられたと聞きました。
た。

ガッツ先生は、中学2年の時に私たちの学校に赴任して、
2年3年の時のクラス担任として、ともに日々を過ごしまし
たね。

先生の口癖が「よし、ガッツ出していこうぜー」だったので、
みんなすぐにガッツ先生と呼んでいた事を懐かしく思います。
1年の時の担任が寛容な先生で、そのままのびのびと学校生
活を送っていた2組の私たち。

先生の誕生日には、朝のホームルームでハッピーバースデー
をみんなで歌ったり、体育祭には「ガッツ」と刺繍した揃いの
鉢巻をしたりと楽しい日々でした。

2年生のある日、調子に乗り過ぎた私たちは、テレビのコ
ントでやっているような「黒板消しをドアの上に挟み、先生
の頭の上に落とす」というのをやってみたくなり、クラスメ
イトの誰かが、見よう見まねで仕込んでいました。

ガッツ先生は予定どおりドアを開け、黒板消しが、ポフンと
先生の頭の上へ。

すると、先生は静かな、でも怖い口調で、「おい、これは、誰も反対しなかったのか？　どうなんだ、はるみい」と、いきなり私を名指して聞いてきました。私は、連帯責任とはいえない「ごめんなさい」を言い出せず、「なぜ私にだけ聞くのだろう」ともやもやした、後味の悪い気持ちになりました。

コロナ前のクラス会でこの時の話になり、あるクラスメイトが「先生は、あの時なぜ、みんなの前で、はるみだけに話を聞いたのか、30年経ってもどうしても気になってる」と言われました。私も言われるまでそのことは忘れていたのですが、今思えば、先生はドアに挟んであった黒板消しにあらかじめ気が付いていて、私たちのいたずらにわざと引っかかったのではないですか。その上で、私を取っ掛かりに、クラスみんなの心を知りたかったのではないかと思っています。

そして、中学生の私がみんなの前で答えられなかった気持ちは、「ガッピン先生には申し訳ないけど、このベタな出来事は、一生の思い出になるんじゃないか」ところいじりました。

事の真相は将来そちらで聞き出すとして、沢山の生徒たちに元気とやる気、思春期の瑞々しい気持ちを育ててくれたって、

ありがとうございました。ゆっくりとお休みになって、ご家族をお見守り、私たちの到着を待っていてくださいね。

〈 道 / EXILE 〉